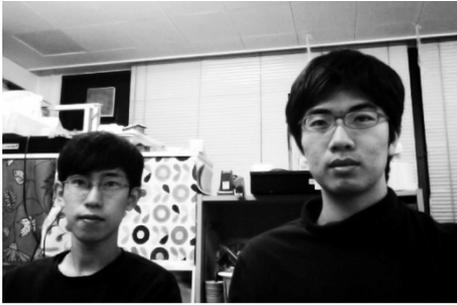


町家を縫う小径【優秀賞】



設計者

大重雄暉・井上岳

◎設計主旨

本町筋沿いの町家に小径を挿入し、再活用をはかるとともに本町筋の活気を取り戻す。近年、歴史ある本町筋沿いの町家は空き家になっているか、もしくは所有者がいても部材が傷んでいたり正面をシャッターで閉め切ってしまったりと、十分な管理活用がなされていないと思われるケースが増えている。また、そのことが原因の一つとなって、本町筋はかつてのにぎわいを失ってしまっている。そこで、活用されているいないに関わらず、町家の妻面方向に、木製フレームで作られた小径を挿入し、手前（ミセ）を住民のための半公共空間として解放し、住居を奥へと再配置する。ミセが個人宅の中の公共的空間から、住民全員のための空間へ生まれ変わり、空き家や遊休不動産となっていた町家を再び街へ参加させる。加えて本町筋を歩行者専用空間とすることで、格子戸等の間仕切りによってミセは本町筋とゆるやかに溶け合い、町家の輪郭に沿って大きくて、起伏のある公共空間が形作られる。

こうして出来た新たなミセ空間に、書道や茶道といった習い事のためのレンタルスペースや教室、児童館といった、文化交流施設を既存の商店などに混じって配置することで、街のにぎわいを創出させつつ、かつて本町筋の商人たちの嗜みであったように、本町筋に住む人々が、日々を過ごしながら文化教養を身につけることのできる豊かな空間の醸成を図る。

◎講評

○難波和彦審査委員長

奥行きが深く、道路側から見世（店）と住居とに機能的に分かれている町家の空間構成目をつけ、見世と住居の間に細い路地（小径）を通した提案です。

この小径を隣家と結びつけることによって、表通りと裏路地という、網目のような街並みを作り出しています。これによって見世が性格の異なる二つの道に面することになり、街全体が活性化すると同時に、小径が奥の住居部分と見世を柔らかく仕切り、風や光を取り入れる緩衝帯となります。

表通りから裏庭に抜ける土間をウェブ状にした関係づけ、町家を立体化しようとする提案といえるでしょう。

○朝岡市郎審査委員

店（半公共空間）と奥（住居）の間に、小径を創造し、本町筋のおもむきを保存しつつ、にぎわいを取り戻す提案です。

本町筋の町家の奥が深い敷地を活用して、誰でもが通れる小径を連続させてさせるすばらしい提案で、使われずに朽ちようとしている町家の有効活用ができることが高く評価されたと思います。

○浅野聡審査委員

この提案は、町家のミエとオクを分離して両者の境界部分を「小径」として開放し、隣接する町家同士でこれを連結させて活用する点が特徴的です。これと類似しますが、隣接する町家同士の裏側の敷地を開放して生活道路等として利用する提案は、たびたび他の歴史的町並みでも行われてきましたが、実際にはプライバシーや防犯上の問題等から実現するのは難しい状況にありました。

アイデアはよいが実現するのは難しいといわれなかったためにも、この小径の24時間の管理体制等も提案して頂くとよかったのではないかと思います。また本町筋の景観ではなく、テーマである小径の景観を大きく描いて頂きたかったと思います。

○生田京子審査委員

夢のあるデザインである。町家の棟の部分で、小径をつくり相互の関係性を創出するとともに、ミセ・オクを再構築することで、魅力的な街道空間を再生させようとする案である。小径とオクの住居、小径とミセの関わりも生き生きと描かれており、作品の世界にひきこまれるプレゼンであった。

○清水裕之審査委員

町屋を棟下で前後にミセとオクとして2分割し、前半分のミセを地域のコミュニティスペースや商業空間として活用し、オクを単身者や小家族の居住空間として、コンパクトにまとめ、さらに、さらにそこに小径を挿入させることで町屋相互の連続性を図るという提案は、町屋の構造を理解したリアリティを持った提案として高く評価された。

図面もコンパクトに説明がなされていて、好感が持てた。ただ、町屋における駐車場の解決などに課題が残っているなど、さらなる展開を期待したいと思った。

○日比一昭審査委員

本町筋沿いの町家に「小径」を導入して、つなぐ。そして本町筋側を住民のための半公共空間として開放し、住居を奥に再配置するというアイデアは大変にユニークな提案である。

コンセプトが明快で、実現するには課題はあるが、街の賑わいを創出させる魅力的な提案として評価したい。